

農業の登録内容は頻りに変更されます。農業は最新情報を確認して使用しましょう。最新情報は府・農の普及課、JA、Web版大阪府農作物病害虫防除指針 (<http://www.jpnpn.ne.jp/osaka/shishin/shishin.html>) から。農産物の病害虫発生予防については大阪府環境農林水産部農政室推進課病害虫防除グループ (<http://www.jpnpn.ne.jp/osaka/>)



水稲

◆育苗の管理

出芽がそろった後、緑化するまでは急激な温度変化を避け、強い直射日光が当たらないようにする。かん水は1日1〜2回程度とし、極端な乾湿の繰り返しは苗立枯病を誘発しやすいので注意する。苗立枯病が発生した時は、タチガレエース液剤(500〜1000倍)は種時または発芽後/1回、育苗箱1箱当たり500ml、使用土壌約5ℓ等をかん注する。

田植え適期は、稚苗では育苗日数が20日程度(35葉)、中苗では25〜30日程度で、株元の不完全葉が青々としていて、茎が太く徒長していない若々しい苗が良い苗。

◆箱粒剤の施用

イネミズゾウムシやウンカ類、ニカメイチュウの防除にはプリンス粒剤、いもち病常発地ではルーチンアドスピノ箱粒剤を移植当日に育苗箱1箱当たり50g(使用土壌約5ℓ)を均一に散布し、葉についた薬剤を払い落とす。付属の計量器等を利用し、1箱当たりの施用量を厳守する。

◆元肥の施用

田植前の耕起時に水稲配合(9・

◆病害虫防除

・アブラムシ類
トンネル早熟や露地栽培では、ウイルス病予防のため、アブラムシ類の防除を徹底する(表1参照)。

・アザミウマ類(スリッパス類)
発生初期の防除に努める(表1参照)。また、忌避効果を狙ってシルバーマルチを行ない、外部からの侵入防止のために寒冷しゃで、ほ場の周囲を覆う。

・すすかび病、うどんこ病
すすかび病は多湿で発生が増えるため、ハウス栽培では換気を良くし、露地栽培では過繁茂を避け、下葉をこまめにとるなど、通風を良くし湿度が上がらないよう注意する。また、被害

表1. なすの害虫防除に登録がある農薬

害虫名	薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布液量
アブラムシ類	トレボン乳剤	1000~2000倍	収穫前日まで/3回以内	100~300ℓ/10a
	アードント水和剤	1000倍	収穫前日まで/4回以内	150~300ℓ/10a
	アドマイヤー水和剤	2000倍	収穫前日まで/2回以内	100~300ℓ/10a
	モスピラン顆粒水剤	4000倍	収穫前日まで/3回以内	100~300ℓ/10a
アザミウマ類	アドマイヤー水和剤	2000倍	収穫前日まで/2回以内	100~300ℓ/10a
	コテツフロアブル	2000倍	収穫前日まで/4回以内	100~300ℓ/10a
	アフファーム乳剤	2000倍	収穫前日まで/2回以内	100~300ℓ/10a
アミミシウマ類	スピノエース顆粒水和剤	2500~5000倍	収穫前日まで/2回以内	100~300ℓ/10a
	アードント水和剤	1000倍	収穫前日まで/4回以内	150~300ℓ/10a
	アフファーム乳剤	2000倍	収穫前日まで/2回以内	100~300ℓ/10a

※アフファーム乳剤、スピノエース顆粒水和剤は、アザミウマ類に登録がある。

表2. なすのすすかび病に登録がある農薬

系統	薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布液量
EBI剤系	トリフミン乳剤	2000倍	収穫前日まで/5回以内	100~300ℓ/10a
	ラーイ水和剤	4000~6000倍	収穫前日まで/4回以内	150~300ℓ/10a
チオフェン系	アフェットフロアブル	2000倍	収穫前日まで/3回以内	100~300ℓ/10a

表3-1. なすのうどんこ病に登録がある農薬

系統	薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布液量
EBI剤系	トリフミン乳剤	2000倍	収穫前日まで/5回以内 (バチョフロアブルと合わせて5回以内)	100~300ℓ/10a
	ラーイ水和剤	4000~6000倍	収穫前日まで/4回以内	150~300ℓ/10a
	バチョフロアブル	2000倍	収穫前日まで/2回以内	100~300ℓ/10a
チオフェン系	アフェットフロアブル	2000倍	収穫前日まで/3回以内	100~300ℓ/10a
グアニジン系	ベルコート水和剤	3000倍	収穫前日まで/3回以内	150~300ℓ/10a
脂肪酸グリセリド	サンクリスタル乳剤	300~600倍	収穫前日まで/ -	150~500ℓ/10a

※サンクリスタル乳剤は、幼苗期の散布およびストロビルリン系(アミスター20フロアブル、ストロビーフロアブル)との混用ならびに近接散布で、葉害が発生することがある。また、高温時には葉害を生じることがあるので、施設では温度管理に十分注意する。

表3-2. 野菜類のうどんこ病に登録がある農薬

系統	薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布液量
生物農薬	ボトキラー水和剤	1000倍	発生前~発前初期/ -	150~300ℓ/10a
脂肪酸カリウム	カリグリーン	800~1000倍	収穫前日まで/ -	100~300ℓ/10a

※ボトキラー水和剤は、野菜類で登録がある。
※カリグリーンは、野菜類(トマト、ミニトマトを除く)で登録がある。
※すすかび病の病斑は薬剤をはじきやすいので、展着剤ニーズなどの加用で防除効果が高めることができる。

表4. なすの褐色腐敗病に登録がある農薬

薬剤名	希釈倍数	使用時期/使用回数	10a当たりの散布液量
ホライズンドライフロアブル	2500倍	収穫前日まで/3回以内	150~300ℓ/10a
ランマンフロアブル	2000倍	収穫前日まで/4回以内	150~300ℓ/10a

表5. しゅんぎくの病害虫防除に登録がある農薬

病害虫名	薬剤名	希釈倍数・使用量	使用時期/使用回数	10a当たりの散布液量
マメハモグリバエ	バスターガード粒剤	9kg/10a (生育期林元処理)	収穫3日前まで/1回	-
べと病	カスケード乳剤	2000~4000倍	収穫7日前まで/2回以内	100~300ℓ/10a
	トリガード液剤	1000倍	収穫7日前まで/2回以内	100~300ℓ/10a
	アフファーム乳剤	2000倍	収穫7日前まで/2回以内	100~300ℓ/10a
Zボルドー	500倍	- / -	100~300ℓ/10a	

※トリガード液剤は、ハモグリバエ類で登録がある。
※Zボルドーは、野菜類で登録がある。散布後は、白く汚れる。

*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/使用時期/総使用回数)を表示してごめ。

除草剤使用の注意点

- ・代かきは均平にならず。
- ・最近、移植後30日まで使用できる除草剤が増えているが、ノビエの葉期を見ながら、適期に処理する。
- ・除草剤を使用する時は、散布後7日間は水深3〜5cmの湛水状態を保ち、落水やかけ流しは避ける。
- ・ダッシュワンフロアブル等のフロアブル剤の原液湛水散布では、使用前に容器をよく振って置き、水深3〜5cmの湛水状態で、うねから容器を振って散布する。大きいほ場では田の中央付近からも散布する。
- ・クサトリードXジャンボL等のジャンボ剤(バック剤)は水深5〜7cm以上の湛水状態で、乾いた手で投げ入れる。また、浮き草、藻が多発している水田では効果が劣ることがある。
- ・湛水処理し、散布後1週間は水深3〜5cmの湛水状態を保ち、落水、かけ流し等の水の出入りを避ける。また、処理後の雨による水のあふれも注意する。

野菜

水なす

◆栽培管理

トンネル早熟栽培では、ホルモン剤処理を行なうと梅雨時の落花防止と着果・果実肥大・熟期を促進する。ホルモン剤には、トマトーン(50倍)を用い、開花当日1花房につき1回噴霧する。

露地栽培では排水に努め、降雨後には排水させないようにする。特に、降雨が続くとえき病(褐色腐敗病)が発生するので、下葉をかき取り通風を良くする。

また、土のはね上がり防止、雑草の発生抑制、土壌表面の急激な温度変化を避けるため、わらや黒色ポリやシルバーポリ等でマルチを行なう。

葉は早めに除去し、ほ場外へ持ち出し処分する。

うどんこ病は日照が弱い時や、過繁茂となった場合に発生が多いため、芽かき、葉かきをこまめに行ない、葉が茂りすぎないようにする。ハウス内では適度のかん水を行ない、過乾燥を避ける。

◆褐色腐敗病

梅雨時期や夏から秋にかけての降雨が多い時期に多発する。降雨による土壌のはね上がりで伝染するため、敷きわら等によるマルチを行なう。

排水を良くし、過湿にならないようにする。
発生を認めたら、表4の薬剤で防除する。

◆栽培管理

高温期になるのでハウスの屋根に遮光ネット、寒冷しゃ等を

まめに葉かきを行ない、葉液がかかりやすいようにするとともに、葉裏にもかかるように丁寧

に散布する。

梅雨時期や夏から秋にかけての降雨が多い時期に多発する。降雨による土壌のはね上がりで伝染するため、敷きわら等によるマルチを行なう。

排水を良くし、過湿にならないようにする。
発生を認めたら、表4の薬剤で防除する。

まめに葉かきを行ない、葉液がかかりやすいようにするとともに、葉裏にもかかるように丁寧に散布する。

的に保つ。また、施設の場合、収穫後にうね全面をビニールで被覆し、地表下の温度を上げて地中にいるマメハモグリバエの蛹を殺すことも有効である。

こまつな 病害虫防除

高温多湿条件では、白さび病が発生しやすくなるので、薬液が葉裏にかかるように予防散布する(表6参照)。

連作ほ場で萎黄病の発生の恐れがある場合は萎黄病耐病性品種を選定するとともに、過乾燥および過湿などによる根傷みや、過剰施肥による濃度障害に注意する。発生が多い場合は、栽培を打ち切り、他科作物(しゅんぎく、ほうれんそう、ねぎ等)と輪作を行なうか、太陽熱利用による土壌消毒もしくは、バスアミド微粒剤で土壌消毒する。

表6. こまつなの病害防除に登録がある農薬

病害名	薬剤名	希釈倍数・使用量	使用時期/使用回数	10a当たりの散布流量
白さび病	アミスター-207フロアブル	2000倍	収穫7日前まで/2回以内	100~300L/10a
	ランマンフロアブル	2000倍	収穫3日前まで/3回以内	100~300L/10a
萎黄病	バスアミド微粒剤	20~30kg/10a (均一に散布して土壌薬剤)	は種10日前まで/1回	-

※ランマンフロアブルは、非結球あぶらな科葉菜類で登録がある。



果樹

みかん 病害虫防除

6月上旬にはヤノネカイガラムシの第一世代幼虫を対象にモスピラン顆粒水溶剤(2000倍/4000倍/収穫14日前まで/3回以内)を散布する。6月中旬には、梅雨の合間をぬってミカンハダニの防除にハーベストオイル(150~200倍/夏期6~7月中旬)を、黒点病の予防にペンコゼブ水和剤(400~800倍/収穫30日前まで/4回以内)を散布する。

また、最近被害の増えてきたミカンナガタムシは、成虫(写真参照、体長約1cm)が発生していれば、ミクロデナポン水和剤85(1700倍/収穫21日前まで/4回以内)を散布する。ノコギリ状に食害された葉や半月形の成虫の脱出孔があれば要注意。

*モスピラン顆粒水溶剤は、かんきつのカイガラムシ類で登録がある。
*ハーベストオイルは、かんきつで登録がある。
高温時は、使用を避ける。



ミカンナガタムシ(成虫)

もも

◆新梢の管理

この時期は新梢の伸長が盛んになり、樹勢が強い樹では徒長枝の発生が目立つようになる。徒長枝をそのままにしておくと、樹冠内の日当たりが悪くなるため、着色不良や糖度不足など果実品質の低下を招く。また、6月上旬以降、果実の肥大が急速に進むので、徒長枝に養分を奪われまいよう、徒長枝を間引くとともに、ねん枝や横向きに誘引して枝を徒長させないようにする。

◆病害虫防除

6月上旬に黒星病・灰星病の予防にオーシヤインフロアブル(2000倍/3000倍/収穫前日まで/3回以内)を、シンクイムシ類、モモハモグリガ、アブラムシ類の防除にモスピラン顆粒水溶剤(2000倍/4000倍/収穫前日まで/3回以内)を散布する。

いちじく

◆土壌マルチ被覆

遅くとも6月上旬までに、白色マルチ(抑草効果の高い裏側が黒色の白黒マルチも可)やシルバーマルチなどの反射マルチで土壌を被覆する。

マルチ被覆の効果

- ①アザミウマ類(スリップス類)は白色や銀色を嫌う性質があるため、園内への飛来が減る。
- ②園内の抑草により、害虫の生息地が減る。また、風通しが良くなるため、病害の発生が減少する。
- ③土中にいるアザミウマ類の蛹の羽化を妨げる。
- ④雨水の跳ね上がり防止により、疫病など土中の病原菌が果実へ付着するのを防ぐ。
- ⑤樹冠内部の日照不足を改善し、果実着色や糖度など品質を高める。

◆新梢の誘引

樹勢の弱い樹や主枝の先端部は、6月上旬の早い時期に垂直気味に誘引し、樹勢を強めるようにする。一方、樹勢の強い樹や主枝の基部付近は、新梢の付け根を垂直ではなく、横方向に緩やかに誘引し、樹勢を落ち着かせるようにする。

◆病害虫防除

1~2段目の果実の目が開く6月上旬にアザミウマ類とキボシカミキリとイチジクヒトリモドキの防除にモスピラン顆粒水溶剤(2000倍/収穫前日まで/3回以内)を散布する。6月下旬にアザミウマ類の防除にアデオン乳剤(2000倍/収穫前日まで/2回以内)、疫病の防除にはランマンフロアブル(2000倍/収穫前日まで/3回以内)を散布する。

*農薬名の後の括弧内は、(希釈倍数/使用時期/総使用回数)を表示しています。